

「入蔵途次見聞雑記」

タイトル	「入蔵途次見聞雑記」
著者名	能 海 寛
雑誌名	能海寛研究会機関誌『石峰』
号	第 29 号
ページ	49—55
発行年	2024.3.15
E-mail	Sekihou@hazaway.com(能海寛研究会)

ISSN 1883—4183



能海 寛 略歴

能海寛 法名法流。 石峰と号す。明治元年
5月18日島根県浜田市金城町長田（当時は東
谷村）浄蓮寺に生まれる。12歳で得度し、慶
応義塾と哲学館に学ぶ。恩師南條文雄師の意思
を継ぎチベット探検の論文『世界に於ける佛教
徒』を発表すると共に語学の研究と山岳登山に
よる体力の練磨をなす。郷里にあつては地方史
を編纂して和歌を詠み、益田沖の高島にて寺小
屋を開設する。哲学者、探検家、宗教家として
釈迦直伝の大蔵經の經典を求め英訳經典世に出
す目的で当時鎖国中であつたチベットへ求道の
ため身を挺し仏教巡礼探検を实践した功績は偉
大で有言実行と用意周到さは後世に幾多の教訓
を残す。その苦難の34年の生涯に「般若心經」
西藏文直訳（梵・藏・漢・英）など四巻が著書
として永遠に伝う。

入蔵途次見聞雑記

能 海 寛

第一

(1) 西藏人種

西藏人は骨格偉大何れも五尺七、八寸。黒赤色にして、容貌、顔色、蒙古人種なれども、支那人よりも寧口、満州人、或いは日本人に似て、身體強壯にして能く。寒気雨露に堪へ、性質短気にて念り易く、活気なり。智識は、只宗教を信ずると、食物を得る道を講ずることにあり。私服、家屋、耕作等、未だ野蛮の域を免れず。況や政治等に関する念は殆んどなし。故に理解力甚だ乏しく、只武に長せるのみ。

(2) 西藏人の生活

衣服は毛布を以て織りたる服、又は皮服を着し色は黒赤なり。更に美服なり。常に土間に坐し路辺に坐し、殆ど椅子を用いず。故に牛馬の生活と大差なし。食物は単純にして、只「チンコー」と称する麦の粉の口巴、及び粗製の茶葉を煎出し、之に塩と酥油(バター)を混じたる所謂、酥油茶とを常食とし、外には牛肉、羊肉のあるに過ぎず。更に料理法を知らず。只胃袋を満たしたるを以て満足す。

住所は石磊を畳みあげ、大屋は東京の郵便電信局の建築に類似せる。殆ど洋館風の家屋にして、二階に住いし、階下は牛馬の駄屋となす。又屋根は平土間にして降雨の時は土間の水、片隅に流れて、天気の日には物干し場なり。家屋甚だ不潔にして土足の俛にして寝る所、又土間なり床なく、日本の庭に寝る乞食、浪人物と同様なり。

(3) 蛮狗

西藏の犬は大にして性猛悪故に各戸多く鉄鎖を以て、堅くつなぎ自由に放ちたるは少し。知らざるもの至れば力限りに鎖を張り、牙を出し口へ飛びかかり実に身の毛弥立ち、予折多に於いて野營の近方を通過する際、鉄鎖を切り飛び来り左足に咬付傷三ヶ所(大傷は深く巾五分、長一寸斗り)を負い咬付て、離れざる為に倒し、其所を又右の手に咬み付き負傷三ヶ所流血のまま、暫く其地を出て宿所に帰りたることあり。如此入蔵の一難は毎處、右傷其後凡廿八日にしての商隊の卒ゆる、犬兵の難に候。

右犬は銃よりも刀よりも勝れる西藏人の兵也。

(4) ラマ寺

方形にして中間をあけ両方は、ラマの住所にして前方は入口、奥方は桜を設け仏像を安置し、壁画の仏像あり。入口ヶ所にして、平常は錠をかけ乱りに入ることを不得。これ堂内には金銀等の仏像其他、宝石等あるを以てなり。堂外を「ランマニパーメーフーン」と称へて回り、又門口には、「ランマニパーメーフーン」の輪数斗あり。之を手にして回らし成るべく多く、此念佛を称うるを以て功德とす。故に一輪内又敷下の「念佛」を入れあり。或いは水車に仕掛、昼夜不断転輪せるものあり。門の入口には蛮狗をつなぎ、容易に入ることを不口秘密の一地なり。

(5) ラマ僧

土人と同じく性悪敷粗暴なり。ラマ各々百姓小作を有し、百姓所得の頭をはり、西藏は殆どラマ政治の下に住せり。故にラマの権勢甚だ強し。其ラマ事口を口せば、又大に便利を得れども更に知識なり。無学文盲自分の名をも書き得ず。我大ラマの名をも知らざる程の愚僧多く、此愚上人而も権勢強きゆえ西藏の野蛮の域、脱出する。第一に、ラマを退治せずば、到底西藏国の前途は謀ることを不得ること

(6) 土人

男は、頭髮は生まれたる俣にして之れを幾重にも網み頭上にぐるぐると巻き、夫れに青赤等の玉、或いは銀をはさみ、其髪は肩に垂下し白黒の毛布を着、各々腰に三尺の刀を指し、皮履をはき、能く数十貫のものを指し上げ、多く馬に乗り東奔西走牧畜業を営む。

(7) 土人女

頭髮を数百線に編み下げ、夫れに珠数玉、或いは銀の節りを付け背にたらし、衣服は毛布織の赤染を着多くは履物なく。更に縫法を知らず。たまたま、ふくろべを縫う日本の畳針に畳糸を以てあらあらと縫うに過ぎず。故に、至る所支那人の仕立屋あり。不潔にして大小便「シャガミ」たる俣男女共更に紙を用いず。牛馬の大小便せると同様なり。

(8) 通貨

支那の一文銭は打箭炉以東通せず。只印度の「ルーピー」銀を用い一個、半個、四分の一の切に致して用い四分の一。尚日本の十五銭斗りにして不便極りなく。米、牛乳、塩、菜皆銀貨拂いなり。然らずは針、糸、或いは菜、珠数玉の如き物品と交換するものなり。拉薩には西藏銀錢あり。凡そ銀一錢、二錢のものある由。裏塘地方更になし。

(9) 贅沢品

料理、菓子、砂糖等なり。砂糖は僅かに黒砂糖魂少しくあり。又「タバコ」の葉あり。菓子は何百里外。数ヶ月前に持来るものなれば、高価にして而も味なり。夫れも多くはなし。只粗葉は高価なれども商賈の重品なり。又大特異はラマなり。

(9) 日用品

筆、紙、墨、其他日用品無し。何も角も皆自分に持参せざるべからず。

(11) 言語

我々未だ蛮語に通ぜず。又各地方、各々言語を異に打箭炉、裏塘、巴塘、三軍糧台管下尚数百種の原因あり。支那語に比し、甚だ聞きにくく、ガギグゲゴ、ザジズゼゾ等の獨音多く言語集まり汚く聞こゆ。印度語を「ヂヤギヤルカット」と云い、西藏語を「ピュク」氏菜五を「ヂヤケ」、又五は切れぎれにして、甚だ可笑しく聞こゆ。汝は何れに良くをチョ、ソ°、カ、ナル。甚だ困難ですを「カンモゼ」、我は不用なりを「ガモゴ」等、如く、支那語とも欧語とも発音異なり、寧口、日本語に似たる所多し。

(12) 西藏の数学

日本の一(イチ)、西藏のチ。二(ニ)、ニ。三(サン)、ソン。四(シ)、ジ。五(ゴ)、ガ。六(ロク)、ドウ。七(ヒチ)、デン。八(ハチ)、ヂエ。九(ク)、ゲー。十(ヂュー)、チュ。等の如く全く支那語の転化にして日本音、西藏音又相似る所もあり。

(13) 裏塘の牧場

裏塘の平野は、東西四、五里。南北二、三里。周回、三日騎馬里程なりと云い、一面の平牧場にしていは高塞なると。一はラマ僧の厳禁の為、更に麦畠、菜園なり。只牛馬、羊の放畜場にして、場の東北隅少しく、高地なる裏塘より、一見するは数万の畜生は白きは鷺の如く、黒きは鳥の如く、遙かに遠きは白花園、黒花園の如く群放し、四面山底く、練兵場となさば高山に数倍せる元やなり。其原野を数十或いは数百頭の蛮商隊。或いは騎。或いは駄進行するを遙かに望めば、殆ど砲兵騎兵の東兵然たり。

(14) 廓尔(ゴルカ)又は(ニポール)北京麻口使節一行七、八十名駄馬、牛計七百頭。裏塘に留る三ヶ月蓋し、軍糧官の不尽力とラマ僧の不親切なるより、不毛の個地に九十日を浪費せる。使節一行は八月一日、二日、三日と三ヶ日間に漸次発途せり。一行の盛んなる亜細亜大陸を横断せる廓尔喀使節嗚呼、

又壮快なる哉。

(15) 西藏人口

古来所節個々なれども、或いは一千万、或いは六百万。諸説あれども、今ラマと比較して割出さば凡そ左の如し。

ラマ西藏全国四拾五万人

總土人数はラマの六倍。即ち二百七十万人

計三百十五万人、内外なるべし。

(16) 蛮歌

日本の俗曲に似るもの多し。予が郷里地方にある「粉ひき歌」或いは、数年前流行せる「チョンコチョンコ」の「チョンコ」節等に似たるものおかし。

(17) 裏塘、土用の温度

予、七月二十日より八月三日まで裏塘に滞在。毎日の温度、左の如し。

七月二十日朝	一	日中	六十五度	晴
廿一日朝	一	日中	六十八度	晴
廿二日朝	五十五度、	日中	六十二度	晴
廿三日朝	六十度、	日中	六十三度	晴
廿四日朝	一	日中	六十二度	晴
廿五日朝	一	日中	六十二度	晴
廿六日朝	五十四度、	日中	六十二度	晴
廿七日朝	一	日中	六十四度	晴
廿八日朝	一	日中	六十四度	晴
廿九日朝	一	日中	七十二度	晴
三十日朝	一	日中	六十二度	曇
卅一日朝	一	日中	七十六度	晴
八月一日朝	一	日中	六十六度	雨
二日朝	五十八度	日中	六十三度	雨

(18) 温泉

打箭炉に三ヶ所あり。折多三ヶ所あり。又裏塘の西十清里熱水塘にあり。七月廿六日入湯す。温度適度にして無色少し硫黄臭あり。土人の家屋中に湯を引く。家屋並に湯壺、周圍、不潔。日本入湯の快気なし。主人は□□□□更に入浴せざると見ゆ。

第二

(19) 自裏塘至巴塘

凡そ五百廿里。打箭炉方計程十九站一千一百四十里。

(20) 裏塘より三十里、里楚河を渡る落橋為に、我々は牛皮船にて渡り、馬は鞍子を取りて泳ぎ、首を浮かべて渡。駄子は廓尔喀行者と共に浅き所を渡る。我が荷物は湿れざることと思いて一の行李にて開かざる、十一日間。巴塘にて開け見れば中に水入りて、五色の糸、フロシキ、明黄大五条の袈裟、白衣、衣二連、十二宗綱要等と洋書及び、日記帳等、今尚湿り、或いはカビわき臭気あり、閉口の至り。二日間、之を乾かしたり。落橋は進蔵上難に数うべし。

(21) 我々、裏塘より烏拉の為不得止、ゴルカー行と同日に出発案の如く此夜宿屋なし。断りに彼等の一天幕を借り野宿す。頭塘（タヲタン）には宿房僅かに二、三戸。ゴルカー行並びに之れと同道者等雨

の降るに野營を張る。三十余天幕あり、山間の一原野此一夜は一の都会と変し、牛馬凡そ七、八百頭、炊烟立ち、一大装壯觀なり。

- (22) 頭塘にて、未明起き来れば、己に何れの野營も起来り。フイゴにて火を起こし、張房(即天幕)は凍り、僅かに日光の当たるをまちて、之をたたむことを得、霜は軍營に満ちて土曜。氣尚寒し。ゴルカ一行は、一同滞在。我々及び、同行数百名は前進す。
- (23) 頭塘山、三巴山、大所山は、裏巴間の大山にして、何れも麓より二、三千尺以上。多く火山岩磊々。山頂の両辺には多く湖水あり。或いは噴火口跡ならん哉。
- (24) 拉尔と称する山間の一村店に宿す。朝起きたるは一面の山降雪。此朝頭塘より来れる人の話によれば、頭塘は積雪四、五寸とぞ。拉尔、尚一寸余なりの積雪あり。これは八月五日の朝の事。
- (25) 裏塘の人気悪敷きは、刺嘛了に至るも同様。我々の烏拉を換るや金を取りて、馬を四頭持来たり。鞍も持来らず。尚物をも鞍につけず為に、我々は東奔西走。漸く駄騎共に整い、自ら駄馬を曳きて出発。途中の困難なる心中熱火の如く、腹立つも念じは害忽ちに頭上に来る。熱涙を呑んで蛮人の仰せに推命これ従う。
- (26) 大雪山の東面より南面に回り、西面に至る。三日間、其麓を過ぐ。雪は幾千万年、更に解ることなく、今尚雪深く、中々富士山所の比にあらず。絶頂よりの山波まで、路里岩石更に顛れず、只一面の銀色山なり。
- (27) 我々ゴルカ一行と毎日同行ゆへ、毎日、宿なく為に。二郎湾と称する雪山の下に於いて、破れ天幕を求め毎夜雨の降る夜も、風の吹く夜も、張房に毛布とを被して宿す。
- (28) 八月八日、三巴と称する大雪山の西麓にて張房に宿す。此日、ゴルカ一行七、八百頭、三巴土人、牧畜、牛馬、数百頭、巴塘より来る。旅隊の牛馬数百頭一夜に合す。幾千頭なるを知らず為に、牛馬混して土人の喧嘩あり。中々の大騒ぎなり。我々の馬幸いに渡せざりしも、一時は非常の心配なりし。夜の目も寝られざる程。
- (29) 八月九日、大所と称する地の野營に寝る。一頭の馬を盗まれ為に、又々高価なる烏拉雇いて巴塘に至り。巴塘に於いて紛失の馬代、半額をはらう。三巴に於いて、遁れたる馬難を大所に於いて罹る迷惑千萬なり。
- (30) 又大所にて、夜寝ておる所へ小盜来り。我が傘、手拭等を盗み去り、寺本君、驚きたる為に、行李は手につけざりしは、幸ひなり。
- (31) 道中にて、一頭に乗り、一頭の馬を曳きて行く。後を振り返りて見るは六ヶ敷。其間に行きの繩に挿みきたる蛮刀子(炉域にて買物、凡五円)をぬきて、又盗みとる。少しも油断ならぬ蛮人なり。
- (32) 巴塘には、八月十一日着。毎日七十度内外。胡瓜、かぼちゃ、クルミ、マツタケ、ダイコン、葡萄、ソバ、ムギ、甲魚、牛羊肉、桃、梅、等の食物生し、珍敷キュウリモみ、松茸牛肉汁のソバ。等を食べ、今迄道中の難を僅かに忘れ申し候。
- (33) 巴塘ラマ寺は、程倫寺と称し、三千のラマありと称すれども、今は一千八百なりという。周囲百間四方中を見物せし所、廣大にして、金屋根一本堂あり。常に念住す。食堂大、カマ尾、雄雞多。壁画美なり。外人の入るを嫌う。
- (34) 巴塘には、軍糧府、都閫府、迅専府、守備官正副、二土司官等なり。
- (35) 二回、糧台武氏に面し、入蔵の許可を得、護照を示す。又兵を派して蔵地内に送ることを告げられる。裏塘よりの護送兵は、途中一所に来らざる為に道中非常に不便なりしゆえ、其由を述べ同行致す様、糧台は申されたり。先ず、巴塘管より蔵管地に入ること丈は安心なり。
- (36) 巴塘には人家、漢人、蛮人雜居。凡そ三百余戸。何れも大家高桜なり。尔ども、裏塘に比して舗

子少なく、只二、三戸にすぎず。而も皆高価なり。我々道中用の小間物でも買いたがる程なり。

(37) 巴塘は四面山々にして二方より河来る。北より来る大河を「ゲン楚^{チユ}」河と称し水流急、又水大なり。裏塘里楚河よりも大なり。東より出る小巴冲河は小なり。巴塘は其両河の間にあって、平地凡そ十五丁四角、麦の耕作地なり。二水合わして下ること三十清里にして、金沙江に合す。

(38) 通貨は、只洋錢。即ち印度「ルーピー」のみにして銀魂を以て、洋錢と換へんと欲せば、炉城より裏塘高く、裏塘よりも巴塘、尚價高なり。故に炉城に於いて、凡そ西藏に産する丈の洋式に換へずば、非常の槓毛なり。我々は之を知らずして現に大に損せり。

炉 一錠銀子(凡そ十兩) フースイ 三ケ乃至三ケ半

裏 " " 五ケ

巴 " " 六ケ

而も多く換えることを不得。

(39) 予は七月八日、炉城を發す。其出立の後に本山より送出しの御本尊並びに、三部妙典等通運にて炉城に着す。炉城にて語学を少しく学びたる先生、天主堂の朱氏より。炉城軍糧府に托し、右荷物は裏塘に於いて運賃五元を拂いて正に受取り、又○南條先生、五月十二日、東京出。○国元四月廿日出。○重慶成田氏、六月廿一日出。○重慶領事館武田氏、六月廿二日出。○炉城朱氏旧六月初十日(七月十七日)出の以上、五本の書面は、八月十三日朝、巴塘軍糧府に於いて武糧台に面談の節受取り。以上裏塘にて受取小荷物と巴塘にて見たれば五本の書面とは実に遠来客、西藏内地にて我国人に逢いたる感あり。歡喜置く不能。色々日本の事情、国元の事情、重慶の事情等を審に知り候。実に珍敷一事件なり。

(40) 日本仏教界も益々光彩を召へ、村上、佐藤、両氏の博士、多くの学士を得たること。石川参務、高安、白山氏、の梵学献功なること、乃国監獄教誡口の復任。宗教法の新編等本国の様子を聞き旅途の身乍ら、遥かに東方目出し天を望み候うて、喜び申し候。柳祐信氏の肺病死せるたる由、実に又佛界の一石幸に候。幸に徳永氏、益々健全之由、幸賀候。南條先生より西藏訳経文に付、我々に乘訓せられたること深く肝に銘じて、出来きる丈調べ、度考に候も、我々の浅智なると藏人の秘密策とには、到底充分の効果を得ざることと存じ深く恥入り候。

(41) 蔵訳経文中拉薩より持来られる、小部のもの数部を得本国に送り置きたり。今小生持参の一部の経文は朝夕、勤むものの由に候。初めの一節に曰く。

ཨོཾ། རྒྱུ་ཡམ་རྒྱལ་ལྷ་མོ་ལྷ་མོ།

祈祷法(方)章

マ ラ ナム ソン シュクソー

三(部)合(冊)

ཨོཾ། རྒྱུ་ཡམ་རྒྱལ་ལྷ་མོ་ལྷ་མོ།

ナモー チャンチュプ セン パ トン ワ セクパ

帰命 覚心 強 発 懺悔者

ཨོཾ། རྒྱུ་ཡམ་རྒྱལ་ལྷ་མོ་ལྷ་མོ།

ダー ミン ディ セ キ ワ

如自名行者

ཨོཾ། རྒྱུ་ཡམ་རྒྱལ་ལྷ་མོ་ལྷ་མོ།

刺嘛 ラ キヤプスチェホー

上人にまで守護すべく来現す

॥ सप्तः कृष्णः कृष्णः सः बन्धे ॥

サンケーラ キャプス チェホヘー
覚満(佛)にまで守護すべく来現す

किंवा-सुवस-सु-वकिर्

チヨーラ キャプス チェホー

法にまで守護すべく来現す

[illegible]

ゲンドウン ラ キャプス チェホー

求徳(僧)にまで
守護すべく来現す

२. सर्वव्यापकता - च. दृष्ट वस्तुव्यापकता

テ- シン セ バー ラ チョンパヨンター

ਸਰ ਫ਼ੈਗਲਾ ਚੰਦ ਸਿੰਘ ਭੁੱਲਾ ਪੁਰਾਣਾ ਬਾਬਾ ਸਾਹਿਬ

パ ー ズ ペ ー サ ン ケ ー シ ャ ツ キ ャ ト ワ ラ

।सदृशः स्यात् । २५ ।

チャク サ° ロー

如彼来者(如来)の敵に勝つ者なる、正実成就の覚満、釈迦忍者にまで敬礼を要す。

以上

右の中

ཇེ་བཞེན་ཀུན་ལ་པ་པ་

デー シン シェク パ

That, like as, to go, man

(如来)

४. प्वा. गत्. अ.

如く 行く者

の如き梵文の直訳なるは又一つの蔵訳の見物に御座候。其他覚満(自覚々他覚行遇満)。或いは牟尼を

トウワ(忍者)とせる。皆直訳と見へ候。

(42) 印度西藏間通路


第一站 獨吉嶺(ダーヂリン)通常「ドヂリン」と云う。

第二站 ཀ་ཡོན་ཡུང་ カケンポン

第三站 新大塚 ポーション

第四站 བ་ཕྱུག་མོ་ パタンチェン

第五站 བཀ་པོ་ ナタン

第六站  ニヤートン、印度、西藏の国境にして関所通行難なり。

第七站 རྩུ་མ་ チェマー

第八站 རྒྱལ་ཡོང་ཁྱེད་ཀྱི་ ガリンカー

第九站 マリス ペーリー

第十站 — 第十一站 — 第十二站 — 第十三站 —

(43) 西藏内地拉萨には、印度より大路あり。洋貨物多く入り込み時計、毛布等、洋物多くある由。尔れども、一人として外人はなく、又蔵人の印蔵間往来甚だ難く、蔵人出んとすれば多くは「ニヤートン」にて、殺す由口こと候。

(44) 前蔵には、ゴルカ人、支那人の外人あるのみなり。大寺三ヶ寺あり。何れも七千以上の僧住せる由。三ヶ寺にて二万以上の刺嘛あり。大昭寺、小招寺は有名なれども数百の刺嘛住するにすぎずと云う。大寺には黄金の釜、茶碗等あり。日々、之を用居る由能く候。

(45) 「ゴルカ」一行と道中前後入蔵致「ゴルカ」 गोर्खा ゴルカ 即ち गुरुङ (निफुङ) にして使節を ताका (ターカーダ)と云う。途中馬上に談話す。支那と洋服との喪衣にて帽子は日本にて被る西藏の深帽なり。ゴルカ人は洋服を着するもの過半なり。文字は梵字の頭棒なきものにして、我々梵学を書き示せば彼等之を読み、意を了解致候。

(46) 巴塘は地図にては裏塘の西南にあれども実際は正面方にして裏塘よりは、差引四千尺の低地なるゆへ、温かなる様に相覚へ候。毎日七十度前後なり。

里数

	8月3日発	① 裏塘	高	底
60	4日	① 頭塘	600尺	
40		① 乾海子		600尺
40	5日	① 拉尕	300尺	600尺
30	6日・7日	① 刺嘛了	200尺	400尺
50	8日	① 二郎湾	100尺	400尺
60	9日	① 三巴	300尺	
80	10日	① 大所	100尺	
80		① 奔察木	1,500尺	2,000尺
40	11日	① 小巴池		1,500尺
40	11日着	① 巴塘		1,500尺
計			計 5,800	9,700

520里

巴塘 差引 低 3,900尺

^{シャンボン} 鐘城は^{ラマヤ}刺嘛了より二日里程の内地蛮城なり。人家一千戸なりと云う。

(47) 当西藏達頼刺嘛の名は ཡུལ་པོ་ལོ་ཤིང་པོ་ཅེ་ཡི། 「キャプコンレンポチェイ」と云う。

八月十四日西藏巴塘にて認

能海 寛

水野齊へ

別に書面不認

宛書面御覧相成度候

【解説】

明治32年8月14日、巴塘滞在中に、打箭炉から巴塘間で見聞した記録を、弟の水野齊宛認めた記録である。特に、ゴルカ一行と同道して、苦難の道中を記録し、西藏の気質、人口、気候、生活、食物、言語、数学、歌、気候、通貨、寺院、経典等の諸情報を詳細に記している。

途中、西藏狗の受難、野営中に馬の盗難、天幕での野宿など、街道での事件も記している。特に、第一回の探検は難行の巡礼であったことが伺える見聞録である。(隅田)